

プレゼンテーションソフトを活用した学習者の興味を引き付ける教材の作成と その共有

Creating and Sharing Teaching Materials to Attract the Interest of Students Using Presentation
Software

大井裕子・阿部仁美・木元てる代・齋藤シゲミ・富田麻知子・宮崎聡子
((社)北方圏センター・札幌国際センター)

Ooi Yuko, ABE Hitomi, KIMOTO Teruyo, SAITO Shigemi, TOMITA Machiko,
MIYAZAKI, Satoko (Northern Regions Center(NRC))

要 旨

短期滞在者への短期間の日本語研修においてプレゼンテーションソフト活用がどのような有用性があるのか検討した。また、授業改善への取り組みにおいて、プレゼンテーションソフトを活用することにより、授業内容を明確に自分以外の教師にも提示でき、比較検討が容易にできるようになった。教材の改善過程で、個々の教材の公開・共有・検討がなされ、インターネット空間を利用した共有が始まり、データベース化へと向かっている。

We considered the effectiveness of presentation software on temporary residents undergoing short-term Japanese language training. We studied the efficiency of improving teaching techniques via the use of presentation software, clearly communicating the content of each class session to another teacher. Lesson content as well as teaching techniques can be easily compared. In the process of improving teaching materials, each element can be published, shared, and considered. This naturally leads to the potential distribution of these materials via the Internet and perhaps the creation there of a teaching database.

【キーワード】 プレゼンテーションソフト, 短期日本語研修, 授業改善, 教材の共有

1. はじめに

札幌国際センターでは、短期滞在の研修員に対して、10時間の日本語研修を提供している。従来は、一斉に同じカリキュラムにしたがって授業を行っていたが、2006年度から各教師がそれぞれ独自にコースデザインを行い実施することになった。これには、各教師が当センターとの短期請負契約という形で個々に授業を請け負い、コーディネーター役はいるが、授業内容はすべて個人の裁量に任されており、何をどのように教えなければならないというものはないという背景がある。しかし、10時間という短期滞在者に教えることは他機関ではないため、それぞれの教師が試行錯誤で授業を行っている。そのような中、授業を進めていくうちに、各教師がいろいろな工夫をしているのがわかり、より効率よく授業を行うためにも互いのシラバスを公開し、共有、検討を重ねていった。(注1)

教師間での意見交換をしていくうちに、専門研修後の限られた時間内で、効率的で、興味を引き起こし、授業に集中させるためには、プレゼンテーションソフトを使った授業が有効なのではないかと考え、活用することとなった。本稿では、当センターでプレゼンテーションソフト使用開始から今年で2年経ったのを契機に、各教師が作成した教材の共有、

検討を行った過程で見えてきたプレゼンテーションソフト活用の有用性について述べたい。

2. 札幌国際センターにおける日本語授業の概要

当センターの日本語研修は、JICA（独立行政法人 国際協力機構）の技術研修員に対するものである。研修員は、日本には高度な専門的技術の研修を目的としてきており、日本語の研修は副次的なものであるが、文化としての文字などに対する興味を持っている研修員も多い。JICAから求められている到達目標は、簡単な挨拶や自己紹介ができるようになるというものである。研修員の年齢は幅があり、30代40代を中心に50代の研修員もいる。技術研修の専門ごとにコースが生まれ、日本語の研修もそのコースが単位となる。日本語研修への参加は研修員の自由意志によるが、ほとんどが参加する。各コースの人数は通常は10名以下で、多くても15名を超えることはない。

日本語研修は滞在2カ月未満の研修員を対象とした10時間コースと2カ月以上滞在する研修員を対象とした20時間コースが設定されている。いずれも1回2時間の授業を5回または10回行うもので、原則として月・水・金の週3回実施し、10時間コースは一人の教師が、20時間は日を分けて二人の教師が担当している。2007年度は20時間コースが4回設定されたのに対し、10時間コースは27回設定された。このほか1年に1・2回50時間ほどの集中コースもあるが、圧倒的に10時間コースの数が多い。当センターの日本語研修は、10時間コースが主体と考えられ、本研究もこのコースを対象としている。日本語研修の実施時期は、技術研修に並行して行われるため不定期であるが、時間は、10時間・20時間のコースはいずれも夜、技術研修が終わった後の、7時から9時の間に行われる。

技術研修では、それぞれ英語、ロシア語、スペイン語、トルコ語などの通訳がつき、日本語で直接行われることはない。研修員は全員当札幌国際センター内に滞在し、センター内はすべて英語で生活できる環境にあり、多少英語が使える研修員にとっては、日本語を必要とする場面はそれほど多くはない。

当センターの日本語研修の特徴として挙げられる点は、上記で述べたように、ほとんどのコースが10時間という短期間であること、そして、研修員がほぼ全員日本語の勉強が初めてという点である。そのため、日本語研修はまったくのゼロからスタートする。ひらがななどの文字は紹介するが、語彙や文型の提示の際にはローマ字を使用し、ゼロスタートで10時間という短期のため、授業での口頭の説明においては媒介語（主に英語）を使用している。

3. プレゼンテーションソフトの有用性

当センターの日本語研修の受講生である多くの研修員は、一日中専門研修を行った後の夜に日本語の授業を受講する。このため、疲労感から授業に集中できないこともしばしばである。プレゼンテーションソフトを使い始める前の授業形態は、他の日本語教育の場と、それほど大きな違いはなかったと思われる。絵カード、写真、文字カード、実物教材、OHPや板書、ハンドアウトなどが使われていた。こうした授業形態に問題があったというより、当センターのこの短期コースの特性を考えただけで、より有効な方法を検討していった結果、プレゼンテーションソフトの使用が検討されていった。プレゼンテーションソフトをうまく使えば限られた時間内で効率的に授業を進行させ、さらに研修員に興味を起こさせ、

授業に集中させられるような授業ができるのでは、と考え使用に踏み切った。授業を行う各教室は技術研修の講義もおこなわれており、機器が使える環境にある。それまで日本語の授業用にパソコン1台とプロジェクター1台が常備されていたが今年度さらに台数を増し、同時にいくつかのクラスが開設されても対応できる機器はそろえられている。

3-1 教師にとっての利点

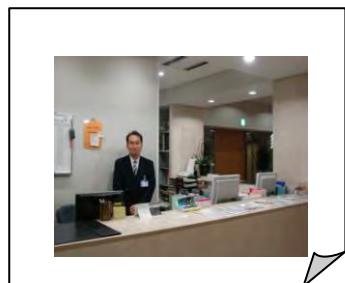
プレゼンテーションソフトの使用に当たっては、これまでお互いの授業や教案の検討を行い、情報を共有しそれぞれの授業の改善を目指してきた。その際も、スライドの作成がそのまま教案作成になり、それによって検討しやすく改善が容易にできた。また、教材内容の変更が容易で、研修や自由時間に訪れる場所(スライド1・2)、実際のセンター内の生活現場(スライド3・4)など写真を用いて具体的に提示できた。



スライド1
最寄の地下鉄駅の
写真を使用



スライド2
実際の写
真を使用



スライド3
札幌国際センター
フロント写真を
使用



スライド4
札幌国際センター
レストランの
写真を使用

コースデザインも、研修の実際の内容に即したものが効果的であるが、多種多様な技術研修のコースの組み方にそれぞれ添わせるためには、プレゼンテーションソフトでの、組み換えの自由さが大変有効であった。

授業が終わった後も、授業で何をやったかがトレースしやすいため、授業後に、再度検討・改善が容易である。また、電子ファイル化により、教師間のデータの共有も簡単にできる。

3-2 学習者にとっての利点

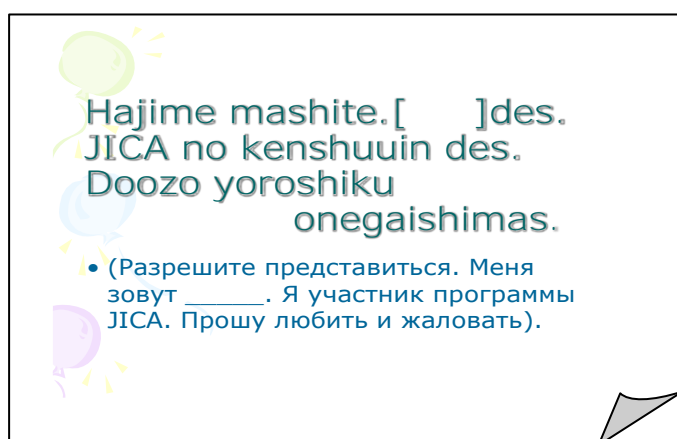
学習者にとっては、一枚のスライドに載る分だけの情報量で提示されるため、わかりやすく集中しやすい。また、視覚に訴えるため、記憶に残りやすく、写真などがあるためより場面を実感しやすい。さらに、スライドによって具体的な場面がいろいろ提示されたことで、学習者は、ソフトを使用する以前より、日本人に対しての質問を様々な工夫しよう

とする意欲が強くなったように感じられた。また、実際に使用するバス停や地下鉄の駅などの写真の提示により、そこで使うと予想される日本語に関してより具体的に興味を示したと思われる。

また、当初は予想していなかったのだが、スライドを配布資料として渡したものが、図らずもテキストとなっていたのである。研修員が講義を聞いている時や、センター内で過ごしていて何か日本語が必要になった時には、この「テキスト」を見ながら懸命に日本語を使っていた。そして、買い物にも持参し、値段を聞くなどの日本語での会話に挑戦していたのである。JICAからは100時間相当の英語訳のついたテキストが渡される。これは、100時間の学習者を対象としているため、基礎的な文法項目が15課にわたり取り上げられているものである。そのため、研修員の日本での生活及び技術研修の場での行動に直接結びつく会話能力の養成を目指す10時間相当の本コースのテキストとしては適さない。そこで、研修員はそれに替えてプレゼンテーションソフトの配布資料をテキストとして使用していたと考えられる。

3-3 教師・学習者双方にとっての利点

ゼロスタートで10時間の場合、媒介語は有効であると考えられるが、教師がそれぞれ媒介語でコミュニケーションをとるのは困難である。2007年度に開設された10時間の日本語研修コースでは、英語圏と非英語圏の割合は2:1であった。この割合をみても、常に英語のみで指示をし、コミュニケーションをとるのには限界があると思われる。授業内でのコミュニケーションには今でも英語がほとんどだが、プレゼンテーションソフトを使用することにより、スライド上で、ロシア語、スペイン語、トルコ語、フランス語などを使用してコミュニケーションすることができるようになった(スライド5・6)。また、プレゼンテーションソフトでは、媒介語の訳が教師間で共有できるため、スライド上に取り込むことができ、研修員の理解をよりスムーズにすることができた。



Hajime mashite.[]des.
JICA no kenshuuin des.
Doozo yoroshiku
onegaishimas.

- (Разрешите представиться. Меня зовут _____. Я участник программы JICA. Прошу любить и жаловать).

スライド5
自己紹介(ロシア語)



スライド6

自己紹介（スペイン語）

授業中のプレゼンテーションソフトの使用においては、前回使用したものをそのまま復習に使用することができる。色やアニメーションで焦点をはっきりさせたり、文字や絵を時間差で、あるいは同時に提示することができるなどの提示の多様性により、見て、考えて、言うという知的回路への働きかけができ、授業に変化をつけられる。また、ローマ字での板書が不要になったため、板書にかかる時間を減らすことができ、その代わりに語彙や表現をプレゼンテーションソフト使用前よりも多く提示することが可能となった。また、ホワイトボードにプロジェクターで映しているため、スライドの情報に簡単に書き足すこともできる。

4. 教材改善への取り組み

先に述べたように、当センターの日本語の授業で何をどのように教えるのかは各教師に任されている。プレゼンテーションソフトを使っている教師たちは、互いにどのような絵や写真を使っているのか、どのように提示しているのかなど、教材について話し合ったり、見せ合ったりして、それぞれの良いものを取り入れてきた。このような個人間の小さな教材の共有は、これまでたくさん行われてきていたが、プレゼンテーションソフトの使用開始から2年を経過したことを期に、個人で工夫を重ねてきたものを公開し、時として個人の中で完結してしまいがちな教授方法についてお互いに意見を出し合い、自分自身の授業を振り返り、さらには他の教師の授業から学ぶ機会を作ろうということになった。

何回かのミーティングを行い、実際のスライドを見せ合って検討した中から出てきたことは、まず、他の人の教材の良い点である。わかりやすいイラスト（朝・昼・晩、これ・それ・あれなど多数）や、研修員が実際に接する場所・場面の写真（フロント・レストランなど）や、アニメーションの効果的な利用などが注目された。

この話し合いから生まれた提案は、「実際の場面をもっと写真で使おう」、「ビデオを活用しよう」、「お酒かジュースか紛らわしいものがあるので、語彙だけではなくお酒のマークなどを教えては（特にムスリムへ）」、「ローマ字表記（desu か des か等）は発音を重視した表記法のほうが良い」など、いろいろあった。

その中でも特筆すべきことは、この話し合いの過程でみんなでの共有をもっと簡単にするため、インターネット上に共有のフォルダを設けたことである。このフォルダに、個人

が作った教材や写真や各国語訳のついた形容詞リスト等を載せることで、誰もがいつでも自由にこれらのファイルにアクセスできる。

このように、プレゼンテーションソフトを使用することにより、教材作成、教授方法のみならず、指導の観点が明確に自分以外の教師にも提示でき、比較検討が容易にできるようになったことから、教師間での教材改善の取り組みにもいい影響を与えた。

5. まとめ

10時間という短期間で、しかも昼間の技術研修の後に行われる日本語研修の授業において、プレゼンテーションソフトの活用は有効であると思われる。プレゼンテーションソフトを活用した教材の改善にあたっては、個人を超えた教師集団のなかで、公開、共有、検討、がなされてきた。その結果、インターネット空間を使い、写真等を含めた教材の共有化を生みだすまでに至った。今後さらに教材のデータベース化を進め、共有化をはかりながら、10時間という短期学習に効率的で、学習者に興味を喚起するような教材を開発していきたい。

注

(1) シラバスの公開、共有、検討の過程については2007年度のフォーラムで発表した。

参考文献

(1) 阿部仁美・大井裕子・木元てる代・齋藤シゲミ・富田麻知子(2007)「短期滞在の技術研修員に対する日本語授業の実践と検証－10時間で何をどのように教えるか－」『2007年度日本語教育学会実践研究フォーラム予稿集』pp. 111-113